



旭川市における子育て支援拠点事業及び子育てサロンの実態

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 千晴, 岡田, みゆき メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006867

旭川市における子育て支援拠点事業及び子育てサロンの実態

岡本 千晴・岡田みゆき*

北海道教育大学大学院教育学研究科（院生）

*北海道教育大学旭川校家庭科教育研究室

The Situations of Child Care Support Center Services and Salons in Asahikawa

OKAMOTO Chiharu and OKADA Miyuki*

Graduate School, Hokkaido University of Education

*Department of Education, Asahikawa Campus, Hokkaido University of Education

概 要

核家族化，地域の繋がり希薄化が進んだことにより，家庭内や地域で子育てを助けてくれる人や子育てについて，相談できる人がそばにいない現状である。そのため，子育てに孤立化している母親が増大している。政府は子育ての不安感の緩和や子どもの健やかな育ちを支援することを目的に「地域子育て支援拠点事業」を整備した。しかし，子育て環境が整ったが，現在の子育て支援が母親達にとって本質的な支援となっているのだろうか。そこで，本研究では，旭川市が行っている地域子育て支援拠点事業及び，子育てサロンにおける母親の利用の変化や利用する親子の気になる点について支援者側から調査し，その課題を明らかにすることを目的とした。また，母親が現在求めている子育て支援のあり方を提起することも目的としている。結果は以下の通りであった。

- ・利用者数が減少している子育てサロンの件数が多かった。
- ・地域子育て支援拠点及び子育てサロンで開催されるイベントは，共に通常行われている開館・開催より多くの親子が参加していた。
- ・地域子育て支援拠点では，子どもに関する相談だけでなく母親自身の悩み相談もあるが子育てサロンでは，両相談件数が少なかった。

1. 研究の目的

1975年頃の日本では3世代同居型の家庭が多く¹⁾，親以外に祖父母や地域の大人が子どもに接し，子育てを担っていた。地域の人々とのつなが

りは，現代よりも密接で人々が子ども達を「地域の子ども」と見守り育て，子育てを支える環境であった。しかし，1980年頃から，都市化，核家族化，地域の繋がり希薄化が進んだことを背景に，父親の子育てへの関わりが少ないことから，家庭

内や地域で子育てを助けてくれる人や子育てについて相談できる人がそばにいない環境にある。子育てが孤立化し、母親の子育ての負担感が増大している。厚生労働省の「平成22年 厚生労働白書」²⁾によると、とりわけ3歳児未満の子どもを持つ女性の約8割は、母親だけで育児をしており、社会からの孤立や疎外感を持つ者も少なくない。

このような背景から、行政は、2007年度より、子育ての不安感の緩和や子どもの健やかな育ちを支援することを目的に「地域子育て支援拠点事業」を整備した。主な基本事業として、①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進、②子育て等に関する相談・援助の実施、③地域の子育て関連情報の提供、④子育て及び子育て支援に関する講習を推進している。具体的には、乳幼児のいる子育て中の親子が予約なく自由に集い交流を行うために、保育所や児童館、公共施設や店舗等の空きスペースを利用して支援している。中でも子育て支援センターは、地域子育て支援拠点の事業の一つとして位置づけられており、地域の子育て支援の活性化、子育ての不安感などを解消し、子どもの健やかな成長を目的としている³⁾。(以後、子育て支援センターとする)全国に地域子育て支援拠点(子ども・子育て支援交付金ベース)は、2017年度は7,259ヶ所あり、2016年度と比べ196ヶ所の地域子育て支援拠点が増加している。うち北海道は366ヶ所あり、2016年度と比べ道内で8ヶ所増加した⁴⁾。

旭川市では、2016年度まで9ヶ所だった子育て支援センターが2017年度は1ヶ所増え、現在市内に10ヶ所ある。また、子育て支援センターとは別に子育てサロンが17ヶ所実施されている。子育てサロンとは、主に公民館や、地区センターなどで開設され、地域の民生委員・児童委員などが中心になって運営している。地域子育て支援拠点事業ができる前から行っている地区もあり、地域に根付いた活動である。地域にこのような子育て支援センターや子育てサロンがあることで、子育ての相談や子育てを通して仲間ができることは好ましいことである。共に手遊びや体操、親子遊びを充

実させてくれる場でもある。親子が集う場ではあるが、「子ども」が主体になっている。旭川市で最初に子育て支援センターを開設した中山(2000)は、支援センターの役割として、地域の子育て家庭に対する育児不安などの相談指導や育児支援、支援センターにくる子どもの遊びや親子での遊びを充実させることが必要であると示唆している⁵⁾。

このように、行政が働き掛けて実現した地域子育て支援拠点の数が増え、子育ての環境が整い、子育て支援拠点の目的が達成したかのように思われるが、現在の子育て支援が、今の母親達にとって本質的な支援となっているのだろうか。その理由として、現代は女性が自分らしい生き方を求めるようになった。しかし子どもが生まれると状況が一変し、育児に忙殺されて一人の時間が持てないこと、高学歴化に伴い母親として生きるだけでは充足し得ないでいること、結婚前に就労経験があり、仕事は努力で成果を測ることができたが、子育ては評価されず達成感を得にくいといった理由から、子育てをすることで、社会から取り残された焦りや孤独を感じている。母親自身を認めてくれる場を求めているのではないか。

以上のことから、本研究は、旭川市が行っている子育て支援センター及び、子育てサロンにおける、母親の利用の変化や利用する親子の気になる点について支援者側から調査し、その課題を明らかにすることを目的とする。また、母親が現在求めている子育て支援のあり方を提起することも目的とする。

2. 研究の方法

(1) 調査方法

本調査は、北海道旭川市にある子育て支援センター10ヶ所の支援者と、旭川市内子育てサロン17ヶ所の支援者を対象とした。これらの拠点に実態調査票を送付し回収した。調査期間は、子育て支援センターについては2018年6月に、子育てサロンについては2018年11月に行った。回収数は、子育て支援センター8ヶ所(回収率80%)、子育

てサロン14ヶ所であった（回収率70%）。

(2) 調査内容

子育て支援センター及び子育てサロンへのアンケート内容は、基本情報（設立、スタッフ数、開館時間）、活動内容（利用人数、運営者平均年齢、人気イベント）、子育て相談11項目とした。また、その他として支援員が利用親子について気になっている点など自由に記述をしてもらった。

3. 結果と考察

(1) 子育て支援拠点と子育てサロンの利用状況

表1-1は、旭川市内の子育て支援センターの設立年度、スタッフ数、開館時間を記した。各拠点、午前中から夕方まで行っており、子育て支援センターに勤務しているスタッフは、2名以上の配置が国で定められていることから概ね2～4名であった。子育て支援センターの設立年は、法律改正と共に設立、増設されている。2003年に「すべての家庭に対する子育て支援」を市町村の責務として明確に位置づけられ、市内2ヶ所の拠点が増設された。また、2007年、地域子育て支援拠点事業については、「ひろば型」「センター型」「児童館型」の3つの形態で再編成された。これまで保育所の一事業として捉えられてきたが、再編成により一つの事業として整理された。また、旭川市「次世代育成行動計画」により、2015年度まで

に子育て支援センターを10ヶ所設置する目標が掲げられた。2013年の2拠点は、この計画を踏まえ、子育て支援センターが未実施の地区にある児童センター内に設置される事となった。表1-2は子育てサロンの設立年度、スタッフ数、開催時間である。子育てサロンは、午前中開催となっており、スタッフは、地域ボランティアで構成されている。子育てサロンは、2002年より各地区に設けられた。2002年に取りまとめられた「少子化対策プラスワン」の中に「地域における子育て支援」が柱の1つに入り、子育てをしているすべての家庭への支援の必要性が明確に政策化され、サロンが広がったのではないだろうか。自分たちが住んでいる地域活動に積極的に関わり貢献したいという意識が強く、スタッフ数が多くいることがわかった。

(2) 利用人数増減

表2は、子育て支援センターと子育てサロンの利用人数の実態である。子育て支援センターでは、利用者数が減っているセンターの方が、増えているセンターより多かった。一方で、子育てサロンは、利用者数が減っているサロンが増えているサロンより多い結果となった。特に、子育てサロンの利用人数が減少している。理由の一つに、女性が社会進出するようになり、育児休暇を終え、社会復帰する母親が増えてきたことが考えられる。そのため、午前中に開催している子育てサロンの利用者が減少している。

表1-1. 旭川市内 子育て支援センター設立年度、スタッフ数、開館時間

番号	地域子育て支援センター名	設立年度	スタッフ	開館時間
①	おひさま	1998	2	9:30~16:30
②	ほっとほたる	1999	2	9:30~12:30, 14:00~16:00
③	よきよき	2003	2	8:30~16:30
④	ねむのき	2003	3	10:00~15:45
⑤	いずみ	2010	2（週3回+1名）	9:00~16:00
⑥	ちゅうりっぷ	2013	2	9:30~15:30
⑦	ばれっと	2013	2	9:30~15:30
⑧	こもれば	2017	4	10:00~16:00

表1-2. 旭川市内 子育てサロン設立年度, スタッフ数, 開館時間

番号	子育てサロン名	設立年度	スタッフ	開催時間
①	大成子育てサロン	2002	7	10:00~12:00
②	永山第3子育てサロン	2003	5	10:00~12:00
③	ちびっこ教室	2003	1~10	10:00~12:00
④	神楽子育てサロン かぐら~な	2003	15	10:00~12:00
⑤	東鷹栖子育てサロン ぼかぼか	2004	10	10:00~12:00
⑥	子育てサロン びかびか	2005	6	10:00~12:00
⑦	神楽岡地区子育てサロン	2006	8	10:00~12:00
⑧	ふれあいいきいきサロン	2006	68~70	10:00~12:00
⑨	千代田ふれあいいきいきサロン (南地区)	2007	21 (その他社協役員数名)	10:00~12:00
⑩	愛宕子育てサロン	2008	15	10:00~12:00
⑪	新旭川子育てサロン	2009	8~10	10:00~12:00
⑫	啓明子育てサロン すくすく	2009	6~8	10:00~12:00
⑬	西御料地子育てサロン	2012	3~4	10:00~11:30
⑭	神居子育てサロン	2013	13~15	10:00~12:00

表2. 子育て支援センター及び子育てサロンの利用人数増減

	増えている	ほぼ変化なし	減っている
地域子育て支援センター	2	3	3
子育てサロン	2	6	6

表3. 子育てサロンの運営者 平均年齢

平均年齢	60歳	61歳	62歳	63歳	64歳	65歳	66歳	67歳	68歳	69歳	70歳
子育てサロン数	2	1	0	2	2	4	0	0	1	0	1

表4. 人気イベントについて

イベント内容	地域子育て支援センター	子育てサロン
運動会	4	0
クリスマス (クリスマスコンサート含む)	4	6
ハロウィン	3	0
夏祭り (おまつり遊び含む)	3	1
お楽しみ会	2	0
お店屋さんごっこ	1	1
手形アート	1	0
餅つき	1	1
バス遠足	1	0
節分	1	0
雛祭り	0	1
寺小屋	0	1
コンサート	0	1

また、表3は、子育てサロンの運営者の平均年齢の表だが、60～70代の方が運営していることがわかった。子育てサロンは主に地域の活動を長年行い、地域の状況もある程度理解している民生委員等が中心になって行っている為、結果、年齢層が高い。子育て中の母親の年齢は主に20代、30代と自分の親以上の年齢差がある。その年齢差から生じる子育て観の違いが、減少の要因ではないかと考える。また各地区で活動をしているため、情報発信も少なく、子育て支援センターのように広く、誰もが参加できる環境ではなく、自分の住んでいる地区の親子の参加が考えられる。

(3) 子育て支援センター及び子育てサロンにおける人気イベント

表4は、各子育て支援センター及び子育てサロンで開催されている人気イベントをまとめたものである。どちらも人気が高いのは、季節の行事であり、中でもクリスマスは人気のイベントであることがわかった。子育て支援センターでは、その他、運動会、ハロウィンといった内容も人気がある。

表5は、子育て支援センターと、子育てサロンの通常の利用者数とイベント時の利用者数の比較を示している。どちらもイベント開催時は、利用者数が多い傾向が見られ、「やや多い」という回答が多かった。また、子育てサロンでは、イベントを実施していないところもあることがわかった。

このことから、子育て支援センターも子育てサロンも親子が楽しめるイベントをほぼ行っている。各子育て支援センター、子育てサロン共にイベント開催時は、参加者が多く、普段自分が通っている子育て支援センターやサロンに関係なく、母親達は参加していることが窺える。それだけ、母親達は、普段家庭では味わえないイベントを楽しむにしていることがわかる。支援者は、子ども達の視点に立って内容を考えており、季節感溢れる行事を中心とし、子ども達が楽しめる活動を行っている。母親は、イベントに参加することで、子どもが楽しんでいる姿を見ることに満足感があ

る。また、イベントは、支援者が主体となって行われ、子どもとばかりいる母親にとっては、ちょっとした息抜きになり、楽しめる時間になっている。

(4) 子育て支援センター及び子育てサロンの子育て相談について

表6は、子育て支援センターと子育てサロンの相談についてまとめたものである。子育て支援センターで「よくある」と回答した相談は、「子どもの生活面」、「子どもの発育・発達」が多かった。続いて、「家庭での子どもの様子」、「子どもの病気や健康について」が多かった。反対に「ほとんどない」と回答した相談は、「子どもの祖父母や親族に関する事」であった。「よくある」相談は、いずれも日常の育児の積み重ねであり、子育てをする中で母親が常に不安を感じる内容である。そして、子育てサロンで「よくある」と回答した相談は、「家庭での子どもの様子やできごと」のみだった。反対に、子育てサロンではアンケート項目の相談が「ほとんどない」という回答が多く、中でも「子どもの祖父母や親族に関する事」が多かった。

どちらも「ほとんどない」相談は「子どもの祖父母や親族に関する事」であり、核家族の家族が多く、祖父母と同居していないため、相談がないことが窺える。また、「保護者自身の精神面（辛さなど）の事」「夫婦に関する事」についても子育て支援センターでは「時々」「たまにある」と回答していた。どちらも母親自身に関する内容であり、子どものこと以外の相談を子育て支援センターで行っている事がわかった。子育てを相談できる人が周りにいないことが窺える。

表7は、その他として、表6以外の子育て相談を自由記載してもらった。数は少ないが、幼稚園や保育園の情報や選択について、子育て支援センターと子育てサロンの両方で相談があった。子育て支援センターと子育てサロンの子育て相談について整理をしてみると、子育て支援センターの多くは、認定こども園、保育園、幼稚園に併設されており、地域の子育て支援の活性化、子育ての

不安感などを解消し、子どもの健やかな成長を目的としている。また、支援者の多くは、保育士や幼稚園教諭が行っているため、子どものちょっとした気になる相談や母親自身の事でも、子どもと一緒に遊びながら気軽に相談ができる利点がある。一方、子育てサロンは1970年以前の井戸端会議に代表される母親同士の情報交換の場や地域の方との交流、支え合いの関係に近く、地域の子育て中の方が子どもを連れてほっとすることを目的としている。支援者の多くは、民生委員や地域の方々を中心にあって行っており、どちらも母親の育児不安の解消に役立ち、気軽に子育ての悩み相談や子育てに関する情報が得られ安心して子育てができる環境である。しかしながら子育てサロンでの子育て相談が少ないのは、子育て支援センターと子育てサロンの目的が違うこと、子育てサロンの支援者の多くは、支援者自身の実体験や経験に基づいて相談にのり、支援者の多くは年齢層が高く、現代の若い世代の母親との子育ての価値観などの違いから相談が少ないのではないか。

(5) 支援者からみた利用者親子の気になる点

表8は、支援者が日頃、利用者親子に対して気になる点や設立当初より変化してきた点について自由記載をしてもらった。記述内容を「利用の仕方」「母親」「その他」というカテゴリーに分けた。子育て支援センターの「利用の仕方」では、「通常開館（子どもを遊ばせながら母親同士が話をしながら交流を持つ場 以下、通常開館）の参加が減少し、イベントや講座のみの参加が増えている」記述が5件、「子育て支援センターへ足を運ぶ親子の時間が以前に比べて遅くなってきている」記述が3件、「0～2歳児の利用が中心になっている」記述が2件あった。「母親」に関する記述内容では、「保護者同士が話し込み、子どもをみていない」記述が2件、「子どもと一緒に家にいられず遊び場を求めている」「母親自身の悩みの相談が増加」など、母親自身の気になる記述が書かれていた。一方、子育てサロンの「利用の仕方」では、「母親同士の交流の場である」という記述が5件、「参加親子の減少」が3件という結果と

表5. 通常の利用者とイベント利用者数の比較

	少ない	通常と同じ	やや多い	2倍ぐらい多い	2倍以上多い	実施無し	無回答
地域子育て支援センター	0	2	3	1	2	0	0
子育てサロン	1	4	4	1	2	1	1

表6. 子育て相談について

質問項目	子育て支援センター				子育てサロン			
	よくある	時々ある	たまにある	ほとんどない	よくある	時々ある	たまにある	ほとんどない
子どもの生活面について	7	0	1	0	0	3	5	3
子どもの発育・発達について	7	0	0	1	0	3	4	3
家庭での子どもの様子や出来事	5	2	0	1	2	3	5	1
子どもの病気や健康について	5	0	2	1	0	2	4	4
子どものしつけや教育について	3	2	2	1	0	3	6	5
保護者自身の精神面（辛さなど）のこと	2	5	0	1	0	1	3	6
子どもと親の関わり方や遊び方について	2	4	2	0	0	2	4	6
子どもの兄弟（姉妹）に関すること	2	3	2	1	0	5	5	3
保護者同士の人間関係について	1	2	2	3	0	1	2	7
夫婦に関すること	0	2	5	1	0	1	1	8
子どもの祖父母や親族に関すること	0	2	3	3	0	0	0	10

表7. その他の子育て相談質問項目（自由記載）

地域子育て支援拠点（センター）	子育てサロン
保育園や幼稚園情報・選択について（2）	保育園や幼稚園の選択について（1）
職場復帰（1）	
友だちとのかかわり方について（1）	
年齢に見合ったおもちゃについて（1）	
一時預かり利用について（1）	
支援センター以外に親子で安心して遊べる場所について（1）	

表8. 利用親子の気になる点、感じる事（自由記載）

分野	カテゴリー	記述内容
子育て支援センター	利用の仕方(11)	通常のサロンの参加が減少し、イベントや講座のみの参加が増加（5）
		利用時間が遅くなった（3）
		0～2歳児の利用が中心（2）
		利用者の利用期間が短くなっている（1）
	母親（7）	保護者同士が話し込み、子どもをみていない（2）
		子どもに対する言葉遣い、接し方がやや乱暴（1）
		子どもと一緒に家にいられず遊び場を求めている（1）
		お母さん自身の心の悩みの相談が増加（1）
		常に我が子をスマホで写真を撮りたい（1）
	乳幼児親子の生活の乱れ（1）	
その他（1）	子どものかかわり方（1）	
子育てサロン	利用の仕方(15)	母親同士の交流の場（5）
		参加親子の減少（3）
		イベントは行わず、会場を開放（2）
		楽しい時間を心がけている（1）
		人数の確保（1）
		定着するのに時間がかかる（1）
		サロンが増え、色々なところへ親子で参加している（1）
		高齢者との関わり（1）

なった。

子育て支援センターでの「通常開館の参加が減少し、イベントや講座のみの参加が増加している」については、子育て支援センター設立当初の目的の1つであった「場を提供し、子育て家庭と子育て家庭をつなげる」といった通常開館のあり方が変化してきたのではないかと考えられる。現代は、SNSで簡単に母親同士が繋がることできるようになり、今

までのようにその場に行かなくても簡単に母親同士が繋がることできるようになった。そして、イベントや講座の参加者が増えているのは、イベントは、支援者主導で子どもの目線に立ち、子どもが楽しめる活動が企画されている。その企画は、母親にとって、子どもの育ちを見通せる場であることから、子どもの成長を感じ、母親自身の自信を養っていく機会になっていることが窺える。講

座に関しては、短い時間でも子どもと離れることで、母親自身の息抜きとなり気分転換をした後、また子どもと向き合おうという気持ちになっているのではないか。「子育て支援センターへ足を運ぶ親子が以前に比べて遅くなっている」、「0～2歳児の利用が中心になっている」については、女性が社会進出する事が当たり前になり、多くの母親が出産後、育休を取得し、その後、復職やパートにでるため、0、1、2歳児の利用が中心となっている。子育て支援センターを遅い時間に利用するのは、幼稚園等の後に子どもと二人きりになる時間が負担になっているからだと思われる。なぜならば、父親の仕事が忙しく、育児に積極的ではない家庭の母親は、子どもの世話に費やす時間が増え、心身共に疲労してしまうことが予測される。母親の体力・精神力が夕方になると限界に近づき、子どものためというより、自分自身のリフレッシュのために利用しているのではないかと思われる。「母親同士が話し込み子どもを見ていない」「常に我が子をスマホで撮りたい」については、支援者がいることから、安心して母親同士が情報交換や会話をしているが、時に支援者の目につくような母親の行動があることが窺える。現代は色々な価値観や多様な生き方があり、母親自身が価値基準を確立するのが大変困難になってきているのではないか。また、手軽に写真や動画の撮影ができる時代、母親にとっては、我が子の思い出を残したいと思うが、支援者側からみると、撮影よりも大切な我が子の「今」に向き合ってもらいたいという気持ちがあることが回答から窺える。

子育てサロンでの「母親同士の交流の場」「参加親子の減少」「イベントは行わず会場を開放」については、地域で子育てをする仲間や地域の人々と交流を持ちながら、地域ぐるみで子育てを行う役割を担っている。だからこそ、母親同士が安心して交流できる場であるという回答が多いのではないか。しかしながら、交流の場の提供のため、母親にとっては、イベントのように子どもの成長を感じにくい事も考えられる。通常開催だけではイベントほど子どもの成長を感じられないこ

と、子育て支援センターのように、市の広報誌に具体的な活動内容が記載されていない為、子育てサロンの活動が母親達に十分に浸透していないことが参加親子の減少に繋がっていることが考えられる。

4. まとめ

本研究は、旭川市内の子育て支援センター、子育てサロンの利用状況や活動内容を把握し、支援者側からみた母親の利用の変化や利用する親子の気になる点を明らかにすることを目的とした。結果は以下の通りである。

- ① 利用者数が減少している子育てサロンが多かった。
- ② 地域子育て支援拠点及び子育てサロンで開催されるイベントは、共に通常行われている開館・開催より多くの親子が参加していた。
- ③ 子育て支援センターでは、子どもに関する相談だけでなく母親自身の悩み相談もある。子育てサロンでは両相談件数が少なかった。

以上のことから、子育て支援センターと子育てサロンの目的の違いはあるが、支援者は子育ての不安を解消すべく親子が楽しめる工夫や、環境設定していることがわかった。しかしながら、通常開館の利用者人数の減少やイベントへの参加が多い事から子育て支援拠点事業設立当初のあり方が変化している。子育て支援拠点事業が設立され15年以上が経ち、情報化や価値観の多様化が進み一人一人の多様な生き方が可能になった。その中で子育てをする母親自身も明確な答えが見つけれず、不安を抱えながら子育てをしている。今一度、子育て支援センターや子育てサロンの運営のあり方を考える時期なのではないか。これからの子育て支援センター及び子育てサロンは、子ども以上に母親自身の存在の肯定や承認を支援者に受容されることが必要ではないか。そうすると母親の安心感が生まれ、その場所が居心地の良いものになるのではないか。そこで生まれる支援者と母親との関係性の質が育児相談だけに留まらず、母親自

身の悩みを受け止める場になり、安心して育児を行う社会になるのではないかと考える。

最後に、本稿執筆にあたりまして、アンケート調査に協力いただいた旭川市内の子育て支援センター及び子育てサロンの支援者の皆様に心より感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 広井多鶴子, (2007), 問題としての核家族: 白書にみる少年非行の原因論, 実践女子大学人間社会学部紀要(3), pp.79-97.
- 2) 厚生労働省, 平成22年版 厚生労働白書 第4節 少子社会の対応～子育て支援施策を中心に～.
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/10/dl/02-02-04.pdf> (入手日: 2019.7.29)
- 3) 厚生労働省, 地域子育て支援拠点事業. https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kyoten_gaiyou_H29.pdf (入手日: 2019.7.29)
- 4) 厚生労働省, 地域子育て支援拠点事業実施か所数の推移. https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kyoten_kasho_31.pdf (入手日: 2019.7.29)
- 5) 中山美知子, 太田光洋, (2000), 地域子育て支援内容と方法 I : 旭川市における子育て支援, 「日本保育学会大会研究論文集(53)」

(岡本 千晴 旭川校大学院生)

(岡田みゆき 旭川校教授)

